［書評］

大平陽一・新井美智代編訳
『子どもたちの見たロシア革命：亡命ロシアの子どもたちの文集』
（松籟社、2019 年、285 頁）

安達　大輔

ソ連崩壊後、日記や手紙といった私的な文書を対象としてそれまで知られることの少なかったソ連時代の人々の内面生活に焦点を当て、制度そのものではなく、制度が人々によってどのように生きられたか、その具体的でミクロな実践を跡づける研究が増えてきた。こうした動向が注目されたのはまずスターリニズム下の日常の考察においてであり、Sheila Fitzpatrick や Jochen Hellbeck（*Revolution on My Mind: Writing a Diary under Stalin*, 2006 等）、それを受けた松井康浩（『スターリニズムの経験：市民の手紙・日記・回想録から』（2014）等を挙げることができる。

最近十年間では、トラウマ的体験の語り直し（フロイトの「夢の作業」）への注目が顕著になっており、2013 年に Alexander Etkind が *Warped Mourning: Stories of the Undead in the Land of the Unburied* を発表している。Serguei Oushakine らは特に戦争の回想に注目し、英語・ロシア語で研究を問うてきた。日本では越野剛らのグループがこのテーマに取り組んでいて、2014 年に『地域研究』14（2）の特集「紅い戦争の記憶: 旧ソ連・中国・ベトナムを比較する」を、2019 年には越野剛、高山陽子編『紅い戦争のメモリースケープ：旧ソ連・東欧・中国・ベトナム』をそれぞれ発表している。歴史叙述の資料としての自伝の扱いに対する問題提起もされ始め、その成果は中村唯史、大平陽一編『自叙の迷宮：近代ロシア文化における自伝的言説』（2018）として出版された。本書『子どもたちの見たロシア革命：亡命ロシアの子どもたちの文集』の編訳者の一人大平陽一は『自叙の迷宮』の共編者であるだけではなく、そこに本書の解説と見なせる論文「亡命ロシアの子どもたちの自叙：学童の回想と文学」を寄せている。このことからわかるように、本書は自伝や回想についての近年の研究の文脈を踏まえて出版されたものと見てよい。

本書には 1917 年のロシア革命を経験した後、革命から逃れ、亡命地の中等学校（ロシア語ギムナジウム）に入学した生徒たちによる作文が集められている。発端は 1923 年 12 月 12 日、当時のチェコスロバキア共和国、モラビア地方の町モラフスカー・トシェボバーにあった在外ロシア最大の中等教育機関（コンスタンティノープルから移転したもの）で、2 時限を費やし、「1917 年からギムナジウム入学までの私の回想」という題で形式や内容を制限することなく自由に作文を書かせたことに始まる。これ

に関心を抱いたプラハの在外ロシア初等・中等教育局が、翌 1924 年早々に中欧およびトルコにある亡命ロシア人のための中等教育学校に対し、モラフスカー・トシェボバーと同じ条件で作文を書かせることを依頼した。その結果、最終的に 1925 年 3 月までに 15 校から 2403 編の作文が集められた。作文を書いた生徒の年齢は 8 歳から 24 歳で、どの学校でも生徒に対していかなる指示も与えなかったというし、署名も強制していない。ここから 5 校（チェコ 2 校、ブルガリア、トルコ、セルビア人・クロアチア人・スロベニア人王国の各 1 校）64 編を「読んで面白いか否か」「拙くとも文学として読めそうな」（24：以下本書からの引用は（　）内にページ数で示す）という基準で選び、翻訳したものが本書である。

この選択基準は単なる文学至上主義とも受け取られかねないため、少し補足的な説明が必要かもしれない。前掲の大平論文では、子どもたちの自叙が文学と密接な関係を持ちながらも「しょせんは既成の文学の模倣に過ぎない」[1] もので、「概してそれは類型的な文学表現にとどまっている」[2] とはっきり述べられている。つまり本書は、生徒たちの作文を既成の文学の水準にどれだけ近づいているかという観点から測るものではない。

編訳者による「はじめに」と題された力の入った序文を見てみよう。そこでは作文が執筆された上記の事情のほか、出版と保管の経緯に加え作文の背景についても丁寧に解説されている。「亡命」という語が在外ロシア社会の支えとなっていたこと、文化こそが離ればなれに暮らす亡命ロシア人たちを一つに結びつけるアイデンティティだったこと、ロシア語学校がその継承の場となっていたこと、そして生徒たちが革命前ロシアで受けた教育の水準や社会的出自について、私たちは知ることができる。本書を出版した目的もこの序文の中で述べられている。まず、大平論文ではっきりと指摘されているように、年長世代の亡命者の回想録が革命以前の生活を理想化しがちで紙幅の多くをその描写に割いているのに対して、名もなき子どもたちによって書かれた作文の集成は「まったく異なるロシア像」[3] を提供してくれる。本書の序文でもこのことが確認された後、しかし歴史資料としての本書の価値にはすぐに疑問符がつけられる。革命前のロシアと文化を理想視する大人たちが創設・運営・教育にあたっていた愛国教育のための機関である亡命ロシアのギムナジウムで授業中に課された作文である以上、生徒たちが教師に読まれることを意識しなかったはずはなく、そこに強いバイアスや自己検閲が作用している可能性が指摘される。多くの作文が似たり寄ったりの内容を持ち、フォークロアを連想させるような類型性を持っているというのである。

生徒たちの作文の中に感知される「文学」とは、こうした似たり寄ったりのフォークロア的な言説を生産するとともに、そこからのズレを生むものであることに私たち読者は注意しなければならない。「同一の主題」の反復と変奏を同時に可能にするも

のとして、それは「トラウマティックな経験を語る痛みを文学的なものの枠に流し込むことで抑えこもうという、もっとはるかに切実な心理的動機の要請する文学性」(13)に至ることもある。

本書の関心が向けられるのは、トラウマ的な体験を語る手段としての「文学」が生徒たちによって実践されるそのさまざまな様態である。作文を「文学」として見ることで「パロール的・個人的な創造とラング的・集団的創造の境界線」[4]を浮かび上がらせようとするのである。作文の配列もこの目的に沿って行われる。第1章には革命から内戦・亡命にいたる歴史を巨視的な視点から描いているものが選ばれ、作文で語られる出来事の背景説明を提供してくれる。続く第2章以下では主題ごとに作文がまとめられるのだが、それは「同一主題の変奏が聞き取りやすいように」(25)するためだと明言されている。第2章に集められた作文では子どもたちの目から見た革命とボリシェビキが描かれ、第3章の作文では革命前のロシアが失われた楽園として美化されている。第4章では革命後の混沌、第5章では内戦、第6章では難民として移動を強いられた子どもたちの放浪体験が主題になっている。最後の第7章に掲載されているのは、トラウマティックな体験について書くためにあたかも自叙であることを否定したような、比較的数の少ない自叙である。

各章の冒頭ではその章の主題が簡潔にまとめられ、それぞれの作文の前には、その背景をなす歴史・社会・文化状況の説明や作文へのコメントが置かれている。これも作文の雑然とした展示に終始することなく、読者が主題と変奏を聞きとりやすいように手助けする工夫と解釈できる。「革命当時の祝祭的雰囲気」「失われた楽園としての革命前のロシアの理想化」「トラウマティックな体験を語ることの拒否あるいは不可能」「移動」といった主題がぶっきらぼうなほど実直に、しかし厳密に指摘される一方で、その変奏が細やかに聞き取られ、作文の書き手と読み手に問いかけられてゆく。集められた作文を時間の流れに沿いながら読み進む読者は、それらを散漫でつながりの欠けた時間の単なる寄せ集めとしてではなく、主題によって構成された一つの平面における同時代的な出来事として、かつ個々のかけがえのない経験たちの衝突と葛藤の時間として体感する。時間芸術と空間芸術を総合し、画面に葛藤をもたらすこの手法は、大平が長年研究に携わっているエイゼンシュテインのモンタージュ論(特にレッシングを取りあげた1937年の草稿)を想起させると書けば読み込みすぎだろうか。確かなのは、コメントと作文を交互に読み進むうちに読者もつい何かを言いたくなる、思わず対話へと引き込まれてしまう、そんな風に設計されているということだ。

対話の一方の相手である作文中の「私」は、回想される出来事を実際に経験する主体と、回想を語る言語上の主語とに分裂しており、本書はこの分裂に語りかける。本書に集められた作文は学校という制度において限られた時間の中で書かれたものであり、この点でロシア革命の回想としては異色である。トラウマ的な経験の回想が起源

に措定される暴力の反復を言葉によって反復し再演することだとすれば、強制された回想であるこれらの作文には、回想における言語の暴力性が顕わになっている。生徒たちは「当時の自分になる」と同時に、「当時の自分を語る」ことを強いられ、経験の主体と言語的主体の分裂に強制的に導かれるのである。本書が立ち上がらせようとしているのは、「語ることができない」「思い出せない」という欠如を示す言葉と、教育の結果として皆と同じ言語で語ること(フォークロア的な類型性を持つ主題や文体)とのあいだでこの分裂を生きようとする生徒の姿である。作文を書いている現場、生徒の「書く」経験そのものに近づこうとする、ほとんど不可能とも思える試みだと言える。

この時私たちは「文学」が二重の意味を帯びていることに気づく。それはほぼ言語活動そのもの、生徒が在外ロシアで受けたロシア語教育と同一視できることもあるが、文学作品で使われる技法を意味していることもある。トラウマ的な体験を語る言語活動は当然ながら文学的な手法には還元されないが、本書では時に両者が単線的に結びつけられているように見える点は気になる。例を挙げると、曖昧な記憶を果樹園などの陳腐なモチーフに流し込み美文調で整形した作文からは、失われた楽園として古き良きロシアを理想化する傾向が読み取られている。それに比べて自身の体験に距離を置くかのような三人称の叙述は、「悲惨な体験を語るにはこうした「冷徹」とも言える叙述を採用するしかなかったというふう」な「もう少し複雑な心理過程」(281-282)の表現として解釈される。けれどもこれらの文学的手法が独立したシステムとしての文学における実験である可能性もある以上、それを心理過程と結びつけることには、もう少し慎重であるべきように思われる。

一方で、文学的手法の枠に収まらない回想がトラウマ的体験の語りの収集からこぼれ落ちてしまうこともある。革命当時の記憶が生々しいと思われる年長グループの生徒が漏らす作文のテーマに対する不満(「こんな題が出るなんてぞっとする。一生懸命忘れようとしてきたことを掘り返さなくちゃならないなんて」)[5]や、回想を強制する力をはぐらかそうとする「生まれた時ぼくは5歳でした」という「拙い、ほとんど見当違いな工夫」[6]は、大平論文には紹介されているものの、本書への収録はない。

革命を経験した主体になることとそれを記述する主体になることの分裂として脱領土化と再領土化が行われる場(これが生成変化の場であることを示すためにこそ、本書では作文の書き手たちを「子ども」という定義の曖昧な語で呼んでいるのではないか)を立ち上げようとするのであれば、文学的な手法以外の言語のジャンルと文体をも考察の対象にする必要があるだろう。書くことで大人たちが抱く子どものイメージを反復する者、それに抵抗する者がいる。大人たちに従うまま旅をしていただけで、自分では出来事の意味を理解していなかったと述懐する者がいれば、家族と離ればなれの孤独な移動について詳細に述べる者もいる。軍・イデオロギー・プロパガンダの

言語を内面化する者、戦闘集団に従うままに殺人を行った当時の自分を反省する者。生徒たちはさまざまな言説のネットワークの中で、経験的主体と言語的主体の分裂という状況をいわば生き直しているのだ。

上記した二つの「文学」についてもより詳細な関係づけが可能だと思われる。本書の序文において、在外ロシアの学校教育では文化を守り続け次世代へ伝承するという使命感が民族教育と分かちがたく結びつき、「ロシア語こそが離ればなれに暮らす亡命ロシア人たちを一つに結びつけていた。そのため在外ロシアの文化生活と創造は、もっぱら言語的であり、ここに訳出した亡命ロシアの子どもたちの作文も例外ではないのである」（20）と書かれるとき、こうした状況では「文学」を学校での国語・文学教育から切り離すことはできないとほぼ示唆されている。これらの教育の実態が、当時のカリキュラムや教科書等の資料を参照することで明らかになれば、本書における「文学」の姿、つまり言語と文学的手法の関係もより鮮明になるはずだ。

本書は回想を「書かされている」生徒たちの現在に迫り、言語と記憶との葛藤の現場を見つめようとする真摯で優しい眼差しに貫かれており、生徒の過去と未来の双方へ読者をいざなう豊かな可能性を秘めた資料体である。最後に、トラウマ的な体験を書くことにおける主体化と空間化の関係という興味深い問題が提起されていることに触れてこの評を閉じたい。プスコフで生まれてからアフリカを経由してクロアチアにたどり着くまでの地名を列挙した作文では、移動の果てしなさと文章の簡潔さのギャップが、書くことにおける主体形成の一つのあり方を示している。「これまでの人生が移動に、個人誌が地理に代わっているかのようだ」（197）。回想を書くことが経験の主体と言語的主体のあいだの空隙を生み出しそれとつきあうことである以上、この行為における空間の重要性は明らかだが、軍隊や政府の絶え間ない入れ替わりを伴う亡命体験が「強いられた移動、望まぬ放浪」（197）に他ならないこうした子どもたちにとって、回想において空間をどのように扱うかは――過去を生き直し、未来のルートを見つける上で――特に重要なテーマだったはずだ。

注

1 大平陽一「亡命ロシアの子どもたちの自叙：学童の回想と文学」『自叙の迷宮：近代ロシア文化における自伝的言説』水声社、2018 年、148 頁。

2 大平「亡命ロシアの子どもたちの自叙」159 頁。

3 大平「亡命ロシアの子どもたちの自叙」126 頁。

4 大平「亡命ロシアの子どもたちの自叙」159 頁。

5 大平「亡命ロシアの子どもたちの自叙」130 頁。

6 大平「亡命ロシアの子どもたちの自叙」136 頁。